

IV 参考資料

1 SR事例シンポジウム結果概要・配布資料

(1) 大阪シンポジウム

【主催】財団法人日本規格協会

【後援】大阪商工会議所

【日時】2009年2月3日(火) 13:30-17:00

【会場】近畿労働金庫 ろうきん肥後橋ビル メインホール

大阪市西区江戸堀1-12-1 (地下鉄四つ橋線肥後橋駅 10番出口直結)

【参加費】 無 料

【申込者数】 122名

【参加者数】 98名

【プログラム】

13:30-13:35 開会挨拶

13:35-14:15 中小企業とSR (ISO26000に関する最新動向説明他)
経済産業省

14:15-14:35 中小企業取組み事例紹介 尾鍋哲也 株式会社尾鍋組代表取締役社長

14:35-14:55 中小企業取組み事例紹介 辻村琴美 新江州株式会社 循環型社会システム研究所 M・O・H通信編集長

14:55-15:15 中小企業取組み事例紹介 福田久美子 株式会社美交工業専務取締役

15:15-15:30 休憩 (紹介事例への質問票の回収)

15:30-16:00 事例報告者への質疑応答

16:00-17:00 パネルディスカッション 「中小企業とSR (社会的責任)」

パネリスト:(五十音順)

宮澤 武明 経済産業省 産業技術環境局 基準認証政策課
工業標準専門職

村上 芽 (株)日本総合研究所 主任研究員

中小企業取組み事例報告者3名

コーディネーター:田中宏司 東京交通短期大学 学長

17:00

閉会挨拶

【内容骨子】

ISO26000 最新動向説明

表題：「中小企業とSR（社会的責任）～ISO/SRの国際標準化をめぐる最近の動向」
説明者：宮澤武明 経済産業省基準認証政策課工業標準専門職
『10年にわたるISO26000の国際審議課程、および同規格のガイダンスとしての概要を解説』

取り組み事例報告①

表題：「NPO法人、金融機関と連携し環境と資産（土地）価値を守るプロジェクト」
報告者：尾鍋哲也 株式会社尾鍋組代表取締役社長
『住宅地盤改良工事にて土壌汚染対策法に着目した金利優遇の仕組みと連携事業の構築を紹介』

取り組み事例報告②

表題：「MOH通信の過去・現在・未来」
報告者：辻村琴美 新江州株式会社循環型社会システム研究所「MOH通信」編集長
『梱資包材製造販売会社による私設研究所のコンセプトと活動およびその環境倫理啓発誌の紹介』

取り組み事例報告③

表題：「知的障がい者の雇用をはじめて」
報告者：福田久美子 株式会社美交工業専務取締役
『公共施設のビルメンテナンス会社が様々な問題点を克服し、障がい者雇用を軌道にのせるまで』

パネルディスカッション

表題：「中小企業とSR（社会的責任）」
コーディネーター：田中宏司 東京交通短期大学学長
パネリスト：宮澤武明 産業経済省基準認証政策課工業基準専門職
パネリスト：尾鍋哲也 株式会社尾鍋組代表取締役社長
パネリスト：辻村琴美 新江州株式会社循環型社会システム研究所「MOH通信」編集長
パネリスト：福田久美子 株式会社美交工業専務取締役
パネリスト：村上 芽 株式会社日本総合研究所主任研究員（着席順）

個別質問への回答編

《回答者：宮澤》

- Q. 政府もほかと同様にISO26000の対象になるのか？
A. 基本は政府組織もほかの組織と同様である。米政府とも合意済み。
Q. ISO26000の普及の観点で適合制度が必要なのではないのか？
A. それぞれの国の組織が自主的に活動するSRの実現に重点を置いているのでガイダンスとした。

《回答者：尾鍋》

- Q. どのように社内の理解を得ていったのか？

A. 公共工事が減り、生き残りの必要に迫られ取り組んだ。判断基準は「これからの社会に求められるものか？」社員にもそのように将来性を説明した。

《回答者：辻村》

Q. 経営理念「人を大切に」とは誰をどの様にするということか？

A. 新江州に関わる全ての人を対象に、豊かで幸せに生活できるようにと考えている。

《回答者：福田》

Q. 活動を進める上で最も気にすることは？

A. コスト管理。障がい者にも健常者一人分の仕事はしてもらう。仕事のやり方を組み替えることで対応するので健常者にもやりやすくなる。

Q. どのように社内の理解を得ていったのか？

A. 社会福祉を顧客（自治体）へのサービスのひとつととらえて、事業を通してのみ行う。もともと個人的想いが発端ゆえ自分で動き、軌道に乗ったら必ず営業に繋がるようにしないと社員が納得しない。

ディスカッション編

《田中》SRに取り組んだ動機とそのときに求めた仕組みについて語ってほしい。

《尾鍋》特別な動機はないがこの業界は元来イメージが悪い。顧客に感謝される取り組みをしたかった。

《宮澤》中小企業ではSRをやっても気づいていないことが多い。SRは特別なものではない。

《辻村》近江商人には「三方よし」の土壌がある。企業理念も含め全てがバックグラウンド。ただしこの世で変わらないものはない。常に時流を考える社風。それが今は環境ということ。

《福田》発端は私個人の思いつき。これがSRとは考えもしなかった。常に振り返り、改善し、次へ次へと結びつけてゆきたい。ビル清掃は現場が中心。そこで新しいフィールドを提供したい。

《村上》今回の報告はいずれも企業理念をもとに社会的問題と事業の結びつきをしっかりと考えているのに感動。セミナーなどで他を知ることは、これまでの事業を「洗い張り」する意義がある。

《田中》行政や地域コミュニティ、NGOなどとの連携の効果はいかがか？

《福田》当社にとり行政は顧客であり関係づくりが大切。たとえば清掃契約の途中で、経過を行政とともにレビューする仕組みがあり、早めの対応がとれる。

《辻村》地域のNPOや行政とはいろいろ協力しているが、公的な補助金などは煩雑で使わない。

《尾鍋》外部連携は積極的に行っている。補助金も活用。連携先とは立場が異なり簡単ではないが、社会にとって正しいかどうかで判断している。証明されていない不可能は不可

能ではないと実感。

《宮澤》ステークホルダーエンゲージメントの考えも入れ連携することで、ハードルの高いテーマも可能になるかもしれない。連携のためには外部への情報発信も大切。

《村上》きっかけは思わぬところに転がっている。内外に発信することで新たな連携の機会が生まれる。

《田中》本日配付の資料は調査レポートのドラフト。昔なら考えられない。情報開示についてはどうか？

《尾鍋》マスコミを使わせてもらうのがコスト効果がよい。予算はかけずに工夫する。

《辻村》MOH通信は本誌に加えブログを活用。地元の琵琶湖放送も利用している。

《福田》情報公開と銘打つとピンとこないが、外部の訪問者には現場をじかに見てもらう。

《村上》公開の中身については、数字をどれだけ出すかがポイント。出来るだけ数字で表現すると新しいヒントも見えてくる。相手から情報が帰ってくる循環は活動の継続のためにも有効。

《田中》今の学生は就活で企業のCSRや環境のレポートをよく見ている。人生を託す見極めに活用。では経営・収益の問題を心の問題についてもふくめ、最後にまとめていただきたい。

《尾鍋》経営課題は山積だが、資金の問題が最大。この時代何もしなければ下降線。何か手を打つ。道德とお金は両立させなければSRは長続きしない。最後は経営者の信用が決め手になる。

《辻村》SR持続のため収益が一番大事と認識。取引先の信頼にもつなげてゆく。よい人材も集まる。

《福田》「私たちにしかできないモノを創る」ということ。業種や大小を問わない。社会の信頼を失うと取り戻せない。これを防ぐのは社内の士気。旗揚げが大切。経営者も社員に見られている。

《村上》トリプルボトムラインは社会・環境・経済だが、収益は必ず必要。他は中身の問題。

《宮澤》SRは日本人が昔から持つ「思いやりの心」がベース。ISO26000は日本企業にもともとある思いやりや志の考えに基づいている。海外からの押しつけでは無くポジティブに受けとめてほしい。

《田中》有り難うございました。他のISO規格と異なり26000では最初から日本が参画提案してきた。東洋的考え方が入ったものと言える。10年にわたり世界150か国の各分野代表が議論したものでまとまった企画は、普遍的な人間や社会のありかたを踏まえていて、他の規格と全く次元が違うものです。

以上

(2) 東京シンポジウム

【主催】財団法人日本規格協会

【後援】東京商工会議所

【日時】2009年2月6日(金) 13:30-17:00

【会場】女性と仕事の未来館ホール

東京都港区芝5-35-3 (JR田町駅三田口(西口)から徒歩3分、地下鉄
(都営浅草線、都営三田線) 三田駅A1出口から徒歩1分)

【参加費】無料

【申込者数】275名

【参加者数】189名

【プログラム】

13:30-13:35 開会挨拶

13:35-14:15 中小企業とSR (ISO26000に関する最新動向説明他)
経済産業省

14:15-14:35 中小企業取組み事例紹介 山本拓己 株式会社オクタ代表取締役社長

14:35-14:55 中小企業取組み事例紹介 佐藤淳子 株式会社ニラク 人資部採用チームフィールド採用担当マネージャー

14:55-15:15 中小企業取組み事例紹介 小山喜代司 株式会社コヤマ代表取締役

15:15-15:30 休憩 (紹介事例への質問票の回収)

15:30-16:00 事例報告者への質疑応答

16:00-17:00 パネルディスカッション「中小企業とSR (社会的責任)」

パネリスト:(五十音順)

柿崎 平 (株)日本総合研究所 上席主任研究員

濱坂 隆 経済産業省 産業技術環境局基準認証政策課
課長補佐

古谷 由紀子 (社)日本消費生活アドバイザー・コンサルタント協会 常任理事

牧 葉子 川崎市 環境局地球環境推進室 室長

コーディネーター:田中宏司 東京交通短期大学 学長

17:00 閉会挨拶

【内容骨子】

ISO26000 最新動向説明

表題：「中小企業とSR（社会的責任）～ISO/SRの国際標準化をめぐる最近の動向」
説明者：濱坂 隆 経済産業省基準認証政策課課長補佐
『10年にわたるISO26000の国際審議課程、および同規格のガイダンスとしての概要を解説』

取り組み事例報告①

表題：「LOHAS –Lifestyles of Health and Sustainability」
報告者：山本拓己 株式会社オクタ代表取締役社長
『住宅リフォーム事業の経営改革と環境配慮の住文化提案型業態への転換に成功するまでを報告』

取り組み事例報告②

表題：「ニラクの障がい者雇用～実際と課題～〈障がいを個性の一部と捉えて〉」
報告者：佐藤淳子 株式会社ニラク人資部採用チームフィールド採用担当マネジャー
『目標を定め法の要求する障がい者雇用率をはるかに超える雇用を達成するまでの課程を発表』

取り組み事例報告③

表題：「知恵と情熱で社員の幸せとお客様満足の向上をめざす～我が社におけるCSR活動」
報告者：小山喜代司 株式会社コヤマ代表取締役
『コンピュータ部品製造などを営む同社が進めた職場環境や地域共生のための総合施策を発表』

パネルディスカッション

表題：「中小企業とSR（社会的責任）」
コーディネーター：田中宏司 東京交通短期大学学長
パネリスト：濱坂 隆 経済産業省基準認証政策課課長補佐
パネリスト：古谷由紀子 社団法人日本消費生活アドバイザー・コンサルタント協会常任理事
パネリスト：牧 葉子 川崎市環境局地球環境推進室室長
パネリスト：柿崎 平 株式会社日本総合研究所上席主任研究員（着席順）

個別質問への回答編

《回答者：濱坂・経産省》

- Q. ISO26000 認証を伴わないがそのことの問題は？
A. 普及に時間がかかるなどのネガも想定できるが、一律に型に嵌めないことがキーポイント。
Q. 中小企業への啓蒙の具体策は？

A. 中企庁のBCP（事業継続計画）を使うのも一案。インセンティブを重点に置きたい。

《回答者：山本・オクタ》

Q. 収益バランスについてどう考えるか？

A. エコな生活に共鳴する消費者が日本でも25%は居る。このマーケットセグメントを開拓し高付加価値のサービスを提供する。CSRの財源はないが広告宣伝費と考えている。

Q. そのほかのメリットは？

A. 従業員も変わり顧客も大きく変わった。顧客の信頼が得られたことが一番。社員の採用もやり易くなった。雇用条件よりミッション共感型の応募が増え、実際社員のパフォーマンスも良くなった。

《回答者：佐藤・ニラク》

Q. 一般従業員への説明はどのようにしているのか？

A. 障がいの内容を極力具体的に伝達しているが行き違いは残る。必要なことはブレないこと。

Q. 収益バランスとその他のメリットについては？

A. 法定雇用率を超えると率に応じ助成金がおきる。障がい者雇用に要する給与はかなり補填できるようになった。奮闘している若い店長やマネジャーを中心に新しい企業文化が育ちつつある。

《回答者：小山・コヤマ》

Q. CSRを展開するに当たり担当チームなどをつくったのか？

A. 何もない。会社としてやるべきことを自然にやってきた。CSRという言葉も知らなかった。

Q. 従業員の生活や収益とのバランスをどのように考える？

A. 200人の従業員から使われている気持ちで経営。地方で会社の評判が落ちると人が来てくれない。

ディスカッション編

《田中》まずSR経営につき、どのようなSR活動がうまくいっていると言える？

《古谷》各社ががんばっているが自社の取り組みを知ってもらうことに目が向いているようだ。

《牧》今回のシンポジウムのテーマでもある「気づき」が一つのキーワードではないか。

《柿崎》導入支援をやっている大企業でも、何をやるのか決めないで始める最も悪いパターンが見受けられる。よそもやっているからと言うケースに多い。

《濱坂》海外でも受け止め方の基本は同じとみるが、一般に見せ方がうまいと思う。SR企業世界ランキングに日本企業は一社しか入っていない。

《田中》では外部組織との連携と情報開示の点をまとめて聞きたい。

《牧》川崎では企業のSR担当者の情報交換会をやっている。「かわさきコンパクト」で検

索すると各企業に行けるので市民にとって情報にアクセスしやすくなる。

《古谷》消費者の気持ちは企業と一緒にになってコミュニケーションしたい。ただしCのとれたSRを考えると消費者の側にも問題があるだろう。

《柿崎》一般にCSR報告書のトレンドは、論点が明確になって情報にアクセスしやすくなってきた。またSRへの取り組みを通し、通常のビジネス以外の接点から学ぶ機会を得ることができる。

《濱坂》情報公開の面では一般に日本と欧米の差は無くなっている。

《田中》SRと収益経営について述べてほしい。

《古谷》今回の報告事例ではいずれも消費者の期待に応えるべく努力されている。さらに社会の期待に沿ってイノベーションを図るなどして収益につなげて欲しい。

《牧》SRを振興することは産業を振興することだ。広告宣伝の場として市が提供できればよい。

《柿崎》大手のサプライチェーンに組み込まれているケースは経済情勢に関わらずSRが組み込まれてゆく。地方の小売業などは、地域と一体の生き残り戦略を立てる。都市部ではLOHASの例のように、経営戦略にSRを織り込んで行くなど、条件に応じた取り組みとなるだろう。

《田中》第三者認証のないガイドンスであることへの国際的合意はどの程度なのか。

《濱坂》メリット・デメリットがあるが国際会議では決着済み。時間がかかってもガイドンスが日本にとって一番良い形。

《田中》企業規模の違いについてはどうか？

《牧》本質において変わらない。取り組みは違って良いが、共通の規格が出てガイドとなる。

《古谷》組織の大きさが邪魔をするケースはある。一方中小企業の取り組みはお金と人の面で、難しいというイメージがある。出来るところから手をつけ、自社の強みを考える機会とするとよい。

《田中》SRの主語は組織。組織が何をするのかというと「決定と活動」。どういう影響が有るかというと「社会と環境」。何を注意するかというと「倫理」。SRを組織の中で統合してやるというのが規格の中に入っている。これを踏まえて、まとめの意見・感想をいただきたい。

《柿崎》一般に組織が成功を重ねると、分業化と効率化を進め、結果、個々の部門の視野が狭くなる。SRは自社の活動と社会との突き合わせを組織的・継続的に行う機会と仕組みをもたらす。企業文化の視点が内部に向かうのを社会に向けるのがSRの本質。結果、倫理観が醸成され、社会のニーズも掘起こされ、業績にもつながる。

《牧》同感。SRを別の仕事にしないこと。日常の中に組み入れ、社会への想像力を働かせる。国際規格は独りよがりにならないための知恵が詰まっている。

《古谷》規格が出来るから、他社がこうだからではなく、ステークホルダーとのコミュニ

SR 実践に関する中小企業事例調査報告書

ケーションをとりながら一歩ずつ進めて欲しい。

《濱坂》個人的に、SRとは「信用」と答えている。国際的に見て創業100年を超える企業は日本に多く、強みといえる。いろいろな荒波に立ち向かい勝ち抜いてきた。これは「信用」の力だ。

《田中》有り難うございました。出席の皆さんは、本日あえてドラフトで配布した生の体験エッセンスをぜひ役立てて欲しい。

以上